

越前陶芸村の“今”を伝える。

歩の歩の

2019.01-03 イベントスケジュール

1/11(金) - 14(月・祝)

上田みゆき「ナルホドね～二十四節気展」
冬の部



墨のアーティスト 上田みゆき氏による
伝統工芸とアートのコラボレーション。
二十四節気の冬をテーマとした展示です。
展示会期中は、ワークショップやライブ
パフォーマンスを開催。伝統の縦系と風土
の横系を織りなすアーティストとして
伝統工芸とコラボレーションしながら、
その風土を表現します。

1/11(金)～14(月・祝)
越前古窯博物館 旧水野九右衛門家住宅
越前古窯博物館 (0778)32-3262

だいこん舎の冬の味
自家製小豆の
そばがきぜんざい

緑茶付 600円
抹茶付 700円
ホットコーヒー付 750円



2/23(土) - 3/24(日)

響きあう酒器展

観覧
無料



越前焼窯元が丹精込めて作り上げた酒器を
一堂に展示。新しい出会いと別れを迎える
春は、お酒を酌み交わす機会も増えます。
大切な人への贈り物を探してみませんか。

2/23(土)～3/24(日)
越前陶芸村文化交流会館ロビー
越前陶芸村文化交流会館 (0778)32-3200

3/2(土) - 31(日)

第8回 土のかたち

観覧
無料



陶芸教室に通う皆さんの作品展。「土」という
一つの素材が人の手を通してうまれる様々な
「かたち」の面白さをお楽しみください。

3/2(土)～3/31(日)
福井県陶芸館 1階ロビー
福井県陶芸館 (0778)32-2174

福引
甘酒ふるまい

新春! 陶芸館 2019

1/12(土)・13(日)・14(月) 10:00・16:00

陶芸館で楽しく過ごす新春企画第3弾!
伝統芸能から陶芸館らしい講座まで
初春の「おめでたい」を詰め込みました。
今年はお客様へ感謝の気落ちを込めて、
お菓子まきや豪華景品が当たる福引も!
ご家族で楽しめる企画盛沢山の3日間。
福井県陶芸館でお待ちしております。

1/12(土)～1/14(月・祝)
★3日間資料館入館無料
福井県陶芸館 (0778)32-2174

雅楽
越前青楽社

デコ羽子板

OTAIKO座 明神+Jr.

八田獅子舞

新春
風つくり

千支づくり

なつかしい遊び

福ふだ

2018
12/15

2019
3/17

越前町民限定
キャンペーン

世界に1つだけの My茶碗を作る

親子でつくろう!
My茶碗

越前町の工房で
世界で1つだけのMy茶碗づくり体験。
お1人につき500円割引!
(越前町民限定)

越前町民
じゃなくても!

My茶碗づくりを体験した方に
限定ステッカーを進呈!

お得に買おう!
My茶碗

越前焼の館にて「My茶碗フェア」開催。
期間中お買い上げの方500円割引!
(越前町民限定)

越前焼の館

—— キャンペーンサイトから簡単予約! ——

①
デザインと
窯元を選ぶ

②
カレンダーで
日にちを選ぶ

③
申込フォーム
からご予約

えちぜんマイ茶碗 検索

echizen_mychawan echizen-mychawan.com

My茶碗キャンペーン事務局 (越前陶芸村文化交流会館内) ☎0778-32-3200
主催: 越前町/越前焼工業協同組合/ふくい「陶」ネットワーク

福井県陶芸館 2019年テーマ展

小曾原、 土管屋さんがいた時代

2019年 2月1日(金)
3月24日(日)



鉄道土管(明治時代 当館蔵)



株田陶管 窯詰め(個人蔵)



土管製造所(小曾原の個人蔵)

陶芸村の周辺では、やきものの土管がつくられていた時代がありました。鉄道土管に始まり、大量生産の時代を経て芸術作品になるまでの土管作りを、写真や資料からご紹介します。やきもの産地ならではの歴史をご覧ください。会期中、展示解説や県政映画(昭和33年、約3分)の上映があります。詳細はHPをご覧ください。

会期 2019年2月1日(金)～3月24日(日)
場所 福井県陶芸館 1階常設展示室
料金 一般200円(30名以上の団体は2割引)
高校生以下、70歳以上の方
及び、ふるさとの日(2月7日) 家庭の日(2月17日、3月17日)は入館無料

人間国宝 近藤悠三

—鈍 固まり、花 開く—

2018年10月6日(土)～12月2日(日)

開催報告

2018年特別展として福井県陶芸館では、「人間国宝 近藤悠三 —鈍 固まり、花 開く—」展を開催しました。

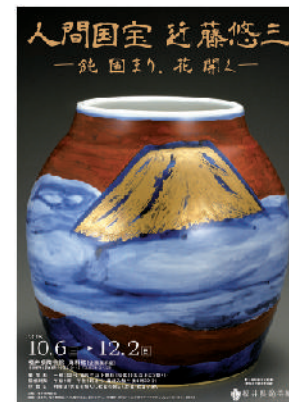
近藤悠三氏はご自身の事を「私は器用じゃなくて、鈍で固まって、それで他の人の思いもよらん技術や作品が生まれてきたんで、決して美術的にとか、芸術的にとか、考えてこしらえたものじゃないんですわ。鈍が固まって、花が咲きかけよった。造花のつぼみじゃないんで、咲いてしまうと落ちるんで、それは困るし、まあ半開きということですか。」

と述べています。本展の副題となっている「鈍、固まり、花開く」もここから付けました。近藤氏はご自身の先を見据え半開きと述べていますが、没後33年たった現在その作品を振り返ってみると、まさに満開。大輪の花が咲き誇っているように感じます。

近藤悠三氏の作品と聞いてまず思い浮かぶのは染付・赤絵・金彩。モチーフとしては石榴(ざくろ)、薊(あざみ)、山。また、壺の形はどこかあか抜けません。評論家の大河内風船子は自身が宋磁を至高としたこともあり、その形や絵柄の修正を再三にわたり忠告していましたが、近藤氏は最後まで自分自身を貫いています。

近藤悠三氏が没した後に風船子は「結論的に云うと悠三君は、頑固極まりなく、自身の核心を中年以後、いささかも変更せずを守り通した陶芸家である。会う度に云い合いをして、罵倒しあい、最良の仲良しだったが、悠三君との争いは、わたくしの敗北に終わった。同じような形、同じような呉須文様、同じような赤絵と金彩をやり通した悠三君の芸道は、最も力強い、最も根強い芸術を完成したと言える。」と述べ、その作品を称賛しています。

近藤悠三氏は1977年に重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝(染付)に指定されました。しかし当人は「私はそんなもの忘れています。いつか誰かにそういわれたけれど、自分はそういうものを貰った事を忘れています。」と語っています。芸術院会員を返上した師・富本憲吉について語ったことばのように「作品自体がすでに勲章」だったのでしょう。



展示担当/小泉洋介